



人類を揺るがした天文現象【5】

# 安倍晴明はハレー彗星を見たか！？

臼井 正

中国の陰陽五行説をもとに日本で成立した陰陽道おんみょうどうは、当時の人々にとっては未来を見通し操作する技術であり、いわば科学であった。天武天皇の時に設置された陰陽寮は、陰陽部門の他に暦・天文・時刻おんみょうしを知らせる漏刻の部門からなっていた。陰陽師たちはそこに所属する国家公務員であったが、しだいに天皇や公家に対して私的な奉仕もするようになる。その陰陽師の代表が皆さんご存じの安倍晴明だ。小説やマンガから始まった安倍晴明ブームもようやく一段落したようであるが、今回は晴明の時代に起きた天文現象を通じて、その活躍をたどってみたい。

## 1. 花山天皇の退位

晴明が活躍した平安時代中期に政治権力を独占していたのは藤原氏であった。その支配のパターンは、自分の娘を天皇や皇太子に嫁がせ、そこに生まれた子が天皇になったときに、天皇が幼いときには摂政、長じてからは関白として政治の実権を握る、というものである。しかし、同時に藤原氏内部で肉親どうしの権力闘争が激しさを増していくことになる。

永観二年（984年）に17才（以下、年齢は全て数え年）で即位した花山天皇は、き子という女御にようごをことのほか寵愛していた。しかし、彼女は即位の翌年、懐妊から7か月のうちに17才の若さで亡くなってしまい、悲嘆にくれた天皇は出家さえ考えるようになった。そこに目をつけたのが藤原兼家とその子の道兼らで、彼らは花山天皇を退位させ、兼家の娘と円融天皇の間に生まれた皇太子を天皇にしようとしていた（後の一条天皇；図1の系図参照）。ついに、寛和二年六月二十二日（以下、漢数字は当時の暦。ユリウス暦では986年7月31日、現行のグレゴリウス暦では8月5日に当たる）の深夜、父親の意をうけた道兼は自分も一緒に出家するからといって花山天皇を御所かざんから誘い出し、花山のふもとの花山寺（元慶寺の別名）に向かった（図2の地図参照）。花山寺で天皇が髪をおろすのを見とどけた道兼は口実をもうけて引き返してしまう。こうして陰謀は成功して、新たに一条天皇が即位したのである。『大鏡』には、この夜の出来事を安倍晴明が天文観測によって知った、という話がある。

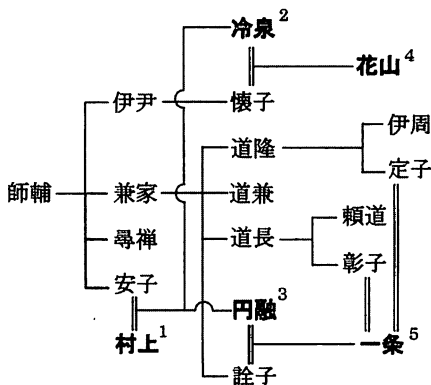


図1 天皇家と藤原氏の関係系図。ゴシック文字が天皇で、数字は即位の順番を示す。

・・・  
 こうして道兼公と天皇が土御門通を東へ向かっていた時、安倍晴明の家の前を通り過ぎましたが、晴明自身の声が出て手を激しくばちと打ち、「天皇がご退位されたようだ。ご退位を示す天変が現れたが、もはや事は定まってしまったらしい。すぐに参内し奏上しよう。早く車の支度をせよ。」と言う声がありました。それをお聞きになった天皇は、たとえ覚悟の上とはいえ胸を打たれたことでありましよう。晴明が、「とりあえず、すぐに式神一人、宮中へ参上せよ。」と命じたところ、人の目には見えぬ何物かが、戸を押し開けて天皇の後ろ姿を見たのでしょう、「ただ今ここをお通りになったようです。」と答えた、ということですから。晴明の家は土御門町口まちぐちにありますから、ちょうど道筋に当たっていたのです。  
 (橋健二訳を改変)

・・・

安倍晴明の家は土御門通と町尻通の交差点の北西にあり、現在の御所よりは西になるが、当時の御所よりは東に位置していた（現在の清明神社のやや東南に当たる）。又、天文博士は、惑星と恒星の間の接近現象や彗星の出現などの天変があれば、それについての占いを添えて内裏に密奏（密かに報告）することになっていた。

この夜、安倍晴明が見たという天変の正体についてはいくつかの考察がある。

斎藤国治氏は天文計算の結果、この夜、歳星（木星）とてい宿しゆくの距星（てんびん座アルファ星）が0.5度まで接近していたことに気付かれた。古来、2つの天体が7寸（0.7度）以内に接近することを「犯」とよんで凶事の子兆としていたことから、数日前から木星がてんびん座アルファ星に近づきつつあるのを見て天皇の退位を予想していたのだ、とされた。一方、栗田和美氏は、天皇が出発した時には木星は既に西に沈んでいることと、この

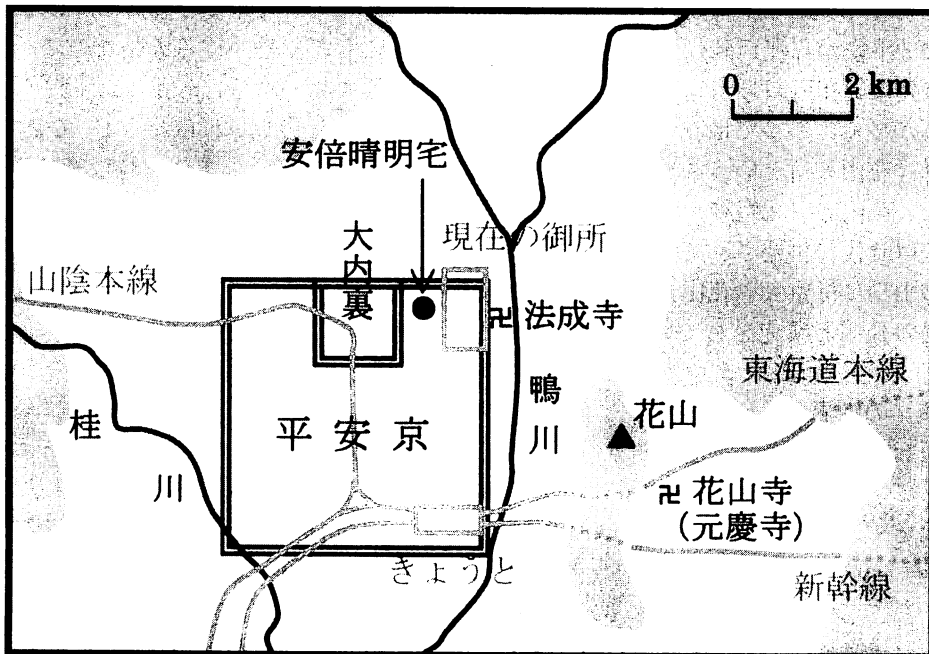


図2 京都の関係地図。グレーの文字は現在のもの。

夜に昴の星々が月に隠される別の天変があったことから、木星とてんびん座アルファ星の接近で得た天皇退位の予想が、昴の食で確信に変わった、と考えておられる。

作花一志氏は、晴明は慎重な天文博士だったという栗田氏と同様の解釈の他に、晴明はこのクーデターの加担者だったかも知れないと推理しておられる。つまり、ベテラン観測家の晴明はすでに数日前から木星の犯が起ることも昴の食が起ることも予知していた。彼はこの2つの天変が二十二日の夜起ることを天皇に奏上すべきなのに、藤原兼家・道兼父子に密告した。彼らは大喜びで、帝に退位を強く勧めた。帝も星のお告げならやむなしとしぶしぶ出家を決意した。晴明は予報が両方とも当たったのを確認して、帝がすでに退位してしまってから役職上の義務として内裏へ報告に行こうとした、というものである。

さて真相はともかく、天皇退位後は出家した花山寺にちなんで花山院と呼ばれ、奇矯な振る舞いもあったが風流者として知られた。ちなみに、平安から江戸時代にかけての天皇は、譲位後の御在所の号が追号として用いられることが多く、かつては花山院天皇、大正時代以降は花山天皇というふうに呼ばれている。また、花山寺（元慶寺）は中世に衰微したが、江戸時代に再建されて今に到り、現在の花山の山頂には京大の花山天文台があって主に太陽の観測と研究をしている。

## 2. 『大鏡』の世界

『大鏡』は、大宅世継おおやけのよつきと夏山繁樹なつやまのしげきが久しぶりに出会って、若い侍を交えて昔語りをする、という設定である。この時、世継は何と190才、繁樹は180才にもなろうかという老人で、二人のうち主に世継が、自分の生きた平安前期から藤原道長の全盛期までの歴史を、鏡に映し出すように明らかに語っている。成立年代は花山天皇の事件があった1世紀くらい後

の院政期頃という程度しか分かっておらず、また、作者についても諸説ある。世継が雄弁に話す様子を繁樹は、「天の川の水をさらさらと押し流すようだが（天の川をかき流すようにはべれど）、時々は事実と違ったことも混ざっている。」と評している。今なら、立て板に水、と言うところだが、当時はこういう表現があったらしい。

話を花山天皇が退位した後、一条天皇の時代に戻す。一条天皇即位とともに摂政となった兼家が没すると、次にその子の道隆が摂政となった。長徳元年（995年）に道隆が亡くなり、すぐ下の弟の道兼が摂政につくが、直後に疫病のため亡くなってしまい七日闕白といわれた。そこでチャンスが巡って来たのがその下の弟の道長で、ライバルは道隆の息子の伊周これちかのみであった。

この伊周について『大鏡』は次のような話を伝えている。兼家の兄弟で天台座主（てんさいざす）だった尋禪じんぜんのお付きの僧で、人相を良く見るものがいた。藤原氏の有力者について占っていく中で、道長については最高の相で限りなく繁栄する人相なのに対して、伊周いかすちは雷の相である、と言った。雷の相とはどういうことかと尋ねられると、ひとしきりは大変高く鳴る、つまり一時は権勢も強いが、最後まで成し遂げることがない相だと説明した。実際、伊周はすぐに大臣になったが、花山上皇に矢を射かけるという事件を起こし、左遷されてしまう。

この出来事について、語り手の翁である世継は、「雷は落ちてしまっても再び天空に戻りますから、伊周公の場合は、雷ではなくて星が地に落ちて隕石となるのにたとえるべきでしょうね。隕石こそは落ちたら二度と再び天へ返り上がることはないのですよ。（雷は落ちぬれど、またもあがるものを、星の落ちて石となるにぞたとふべきや。それこそ返りあがることなけれ）」と辛らつなことを言っているが、こんな所に隕石が出てくるのは面白い

(科学的に見ても、雷は一瞬の内に雷雲から地上へ、そして地上から雷雲へと何回か往復しているの、間違っことは言っていない)。こうして権力を握った道長は娘の影子を一条天皇のもとに入内させ、そのサロンに紫式部が女房として仕えることになる。一方、清少納言が仕えていた道隆の娘定子の勢力は衰えて、定子は若くして世を去ってしまった。ただし、こうした人相による予言が本当にあったのかは分かっていない。

### 3. 安倍晴明の虚像と実像

伝説の上では安倍晴明は狐の子とされている。晴明は安倍保名と葛の葉の子として生まれたが、実は葛の葉は保名が助けた狐であって、正体がばれたことから和泉の国(大阪府南部)の信太の森に泣く泣く帰っていったという。その時に葛の葉が詠んだとされる、

恋しくば尋ね来てみよ和泉なる  
信太の森のうらみ葛の葉

という歌は有名である。晴明は幼い頃から賀茂忠行に陰陽道を学び、やがて数々の活躍をするようになる。

晴明伝説のうち、まず花山天皇の前世を見通した話を紹介しよう。花山院が天皇の位にいた時に頭痛に悩まされ、とくに雨の日は耐えようもないほど苦しまれた。どんな医者に見せても直らないので晴明を呼んだところ、晴明は「花山天皇は前世では尊い行者で、大峰山脈で修行中に亡くなられた。その修行の徳によって、この世では天皇に生まれただけども、前世のお体のドクロが岩の間にはさまっていて、雨のときには岩が水でふくらんで、このように痛むのです。」と申し上げた。そこで、晴明が教えた所に行くと確かにドクロがはさまっていて、それを取り出したところ頭痛がおさまったという。

法成寺を建立していた藤原道長が、そこに

白い犬とともに毎日通っていた時の話もある。ある日のこと、道長が寺に入ろうとすると、この犬が先回りしてさえぎる衣服の裾にかみついたので、不審に思っ晴明を呼んだ。かけつけた晴明は、道長を呪詛するものが道に埋めてあって、犬には神通力があるので主人に危険を知らせたのだ、と語った。道を掘ってみると、土器を二つ合わせたものが出てきた。晴明が、懐紙を鳥の形に結んで呪文とともに空に投げあげると、白鷺となって南に飛び、道摩(蘆屋道満のこと)の家に落ちた。道摩は、左大臣の藤原顕光の命令で術をしかけたことを白状し、故郷の播磨へ追い返されたという。しかし、晴明が亡くなったのは寛弘二年(1005年)で、法成寺の建立が始まったのは寛仁三年(1019年)なので、この伝説が生まれたのは晴明の死後のことである。また、晴明が狐の子であるという伝説も室町時代末頃になって成立したとされており、晴明の死後に色々な立場から伝説が付け加えられていったらしい(こうした展開については、諏訪春雄氏の『安倍晴明伝説』に詳しい)。

それでは、晴明の実像はどのようなもの



図3 神になった安倍晴明(晴明神社)。

だったのだろう。亡くなった時に85才(数え年で)だったという記録を信じれば、延喜二十一年(921年)に生まれたことになるが、生誕地や前半生については分かっていない。信頼のできる資料の上に晴明が登場するのは天徳四年(960年)のことだということから、もう40才になっていたはずである。しかし、これ以降の晴明は、花山・一条天皇や藤原道長とも深く結びつき、歴史書にも度々登場する。とはいえ、その活躍は伝説や小説と違って、病気の原因や治療方法についての占い、建築や外出などの日時たいざんぶんくさいの決定、そして、泰山府君祭たいざんふくんさい・玄宮北極祭などといった種々の儀礼や祭祀をとりおこなう、というような仕事が主であった。花山天皇が退位した年の二月には、「太政官の役所の東ひがしの庇のうちに蛇がいる」とか、「家鳩が、太政官の役所にある右大臣兼家の椅子や机のまゑに集まっている」というような些細な出来事についても晴明が占っているが、これは花山天皇と兼家の緊張関係をも示していると考えられる。

天元元年(978年)に雷によって安倍晴明宅が破損した、という記録もある。有名な陰陽師の家が天災にあったことを当時の人はどう思ったのだろう。また、時には晴明もミスをすることがあった。藤原実資の日記『小右記』によると、一条天皇の時代の永延二年(988年)、螢惑けいごく(ケイは虫を火にしたものが正字; 火星)が軒轅女主けんえんじょしゅ(しし座のレグルス)に接近(前述の「犯」)したことがあった。天皇・皇后とも重い物忌みに入り、天台座主の尋禪が熾盛光法を、安倍晴明が螢惑星祭を執り行うことになった。しかし晴明は決められた日に行わなかったために、始末書(過状)を提出するように命じられたという。このように、歴史の中の晴明は超人的な能力を発揮しているわけではなく、あくまでも陰陽寮に属する国家公務員としての活躍だったのである。

#### 4. ハレー彗星出現

永延三(989年)年の六月に突然、彗星が現われた。現在ハレー彗星と呼ばれているこの彗星の記録は日本や中国に残っており、『日本紀略』には「六月一日庚戌、其日彗星東西天に見はる」(六月一日はユリウス暦で7月6日にあたる)、「七月中旬、連夜彗星東西天に見はる」とあり、別の記録では尾の「長さ5尺(5度)ばかり」とある。作花氏の計算によるとこの時のハレー彗星は、ユリウス暦で7月初旬に日の出前、東天のおうし座に現われ、次第に東へ移ってふたご座に入り、8月下旬にはしし座とおおぐま座の間を通り抜けた。9月初めには太陽と同方向のため見えない日が数日あった後、日没後の西の空、おとめ座からてんびん座にかけて眺められたはず、とのことである(ユリウス暦8月16日、現行のグレゴリウス暦で21日午前4時の京都の空のシミュレーションが作花氏のページ <http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/monogatari3.htm> で、ご覧になれます)。ハレー彗星の記録は、中国では紀元前からあるが、日本ではこの4回前の回帰が『日本書紀』に「天武十三年秋七月二十三日壬申(684年9月7日)、彗星西北に出づ。長さ丈余(10度以上)」とあるのが最初である。

天変の中でも彗星の出現はとくに恐れられたが、この時は『扶桑略記』に「永延三年己丑八月八日、改めて永祚元年と為す、彗星天変に依るなり」とあるように、何と改元が行われたのである。飛鳥時代から平安時代初期にかけては、めでたい雲が見えた(慶雲:704~708年)、白い亀が現われた(宝亀:770~780年)、というような瑞兆によって改元する、という例もあったが、平安時代中期からは、天変や地災(地震や洪水など)を理由にして改元するようになる。永祚二年には再び改元され正暦元年となっているように、この頃は2~3年で改元を繰り返しており、改元自体は珍しくないが、「彗星出現により」と明

記されていることが注目される。

彗星出現によって改元した例は、他にも平安時代末期の嘉承<sup>かじょう</sup>（1106～1108年）や久安<sup>きゆうあん</sup>（1145～1151年）がある。久安の彗星もハレー彗星で、永祚改元の時から2回後の回帰である。ちなみに、天武天皇の時の出現から永祚改元までは305年、永祚改元から久安改元まで156年で、いずれも76の倍数より大きくなっている。それはハレー彗星の回帰の平均周期は77年に近く、しかも、木星や土星の重力の影響で、それぞれの回帰の周期は平均から±3年程度までのばらつきがあるためである。

付記：898年のハレー彗星の見え方を計算して下さった京都コンピュータ学院の作花一志氏に感謝します。

#### 参考文献

- 学研ムック, 1993, 『陰陽道の本』, 学研  
神田茂, 1935, 『日本天文史料』  
栗田和実, 1998, 「花山天皇退位の夜に起きた星食」, 『天界』1998年2月号, 東亜天文学会  
斎藤国治, 1997, 「花山天皇退位の夜の天変について再考」, 『天界』1997年12月号, 東亜天文学会  
斎藤国治, 1982, 『星の古記録』, 岩波新書  
作花一志, 「陰陽師安倍晴明の見た星」,  
<http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/monogatari.htm>  
諏訪春雄, 2000, 『安倍晴明伝説』, ちくま新書  
橘健二 校注・訳, 1986, 『大鏡一・二』, 小学館  
東京大学史料編纂所編, 1928-34, 『大日本史料・一条天皇』  
森本角蔵, 1933, 『日本年號大観』, 目黒書店